

日の本の奥さまがたへ

在米園 アメリカの下女

母國に居ります間は、一方ならず御世話になりまして、ありがたうございました。何か珍らしきこととあらば、せめては拙筆の通信なりと、御目にかけてまひらせたまものと、心にかけて居るのでございますが、觀察とやらの範圍は庖厨に限られて居る身、それに御存じの通りの無情ものでございませうから、インキとペンは後世大事にデスクの上にてケープして一千九百五年（大變ながい月日のやうにさこえますネー）もとうとう経過して仕舞ひました。

ことしもおさんの泣きごとをきくことかと仰せらるゝかたがたに、思ひもかけぬ御笑草をさしあげて、家庭の談柄に賑かな花を咲かしたいたいのだと、

まてば甘露の日和よき昨日のアフタヌーン、お隣りの下女と世間ばなし、ふる里ならば井戸端會議の筆記のうちに、これこそと思ふ種一ツ、漸くのことで見つけましたからハペーニウオーアの御つかひものといたします。

まことに結構ですからと、自分で褒めて人に贈るはその國の風俗、頂いて見ると余りありがたくもないのですが、これもその類と思召のはど御願ひ申します。

慾ばれアお金はふるアメリカの桑港、はたらいたらすぐに錢をクレー街に、ジャクソンと云ふ中産の家がございました。けふしも主人の弟ジョルジと云ふ男、田舎の住居からやつてきて、一人息子の太郎にプレゼント、思ひもかけぬ太鼓一ツ、四つおの太郎は大喜び、御覽々々と云ふてまづ祖父母

の室にもつてゆきました。

そのおとからノツソリと御機嫌伺ひに参りましたのはジョルジ、お禮の一言もあつかうかと思ひの外、

ジョールジ、お前はマア何と思ふてこんなものを買ふてきたの、太郎が毎日これを叩いてゐる。いたらやかましくして大變ではないか。

久しぶりで両親の小言をさましたジョルジは、そうでしたネーと云ふてももう遅ひ、太郎の太鼓はポンポコボン、廊下を勇ましく行軍して、先づ母の室を襲ひました。頭痛にて鉢巻をしてゐた母は、椅子からとびあがりて、

ケドやケドやそんなものを叩くとかわさんがキーキーがわるくなるよあつちへ御出で、あつちへ御出、

追ひいだされた太郎は父の手紙かくところにゆき

て、青いお眼玉を頂戴し、廊下を逆もどりして祖父の書見の邪魔になり、こゝでも叱りとばされて、次には祖母の編物のうしろからドンドコドンをおびせかけ、おはれそこをも追ひ拂はれて、伯父ジョルジを電話室に訪れ、感謝の太鼓を叩きびだしました。ジョールヂはいま商業のかけひき最中。

エ、二百五十弗、ダメですよとても三百弗より一セントも……

感謝の太鼓ドンドコドン、ドンドコドン、

ア、やかましい、エ、二百七十弗いやいや三百弗でなくては、エ、何ですと、ア、やかましい

感謝の太鼓ドンドコドン、ドンドコドン

エ何ですって、ハッー(もしもし)バアロー、よくきこえませんよエアア、やかましいこの餓鬼

メ、

いきなり太鼓を太郎から奪ひとり、こぶしをつツ
 こんで破つて仕舞いました。ケドの泣き聲は非常
 ラツバ、太鼓どころの話でありませぬ。何事かと
 スリッパのまゝで駆けてくるマンマア、ペンを
 握つてやってくるババア祖母に祖父に包圍攻撃、
 御前どうしたといふのだよジョールヂよ、いゝ
 年をして子どもをなかせてサ

御前新らしく買ふてやりナ

頭をかゝへてかけいだしたジョルヂ、ほど近き玩
 具屋にゆくに小さなるものなしとのこと、まゝよ
 これでもと求めてきたのは驚くでありませんか樂
 隊用の大太鼓、一家呆然、太郎ひとり得意満面、
 指して曰く御覽御覽。

つまりぬ御話でございませすが、どこやら味なとこ
 ろがあるではありませんか。おさんは決して今の

ハイカラ式部さんたちの御厭ひな保守主義とやら
 ではございませぬ。けれど、はいるものは何ても
 家珍だといふ調子で、バタ臭き風俗習慣まで、人
 まねこまねにわが島國へ入るゝと云ふは、そいつ
 いけませぬサワームルク、アイドンケーア ござ
 います。

家庭のよみもの、家庭の小説、女子の何、婦人の
 何、その月ごととその年ごとに殖えゆきて、スト
 ーブのたきつけありあまるが上に、科學的とやら
 心理的とやら、片假名でかく著者の名は下に居ろ
 下に居ると云ふかけ聲にて、翻譯と云ふ帽子はば
 をきかす世の中、二こと目には歐州ではこちらの、
 アメリカではあゝの、先進國はどうとか、文明國
 はかくとか、吾等女性に對するプレセントは餘り
 多過ぎて、うれし過ぎて、よみ過ぎて、はては出

すぎて、家庭の平和が破るゝこともあるではありませぬか。

女性と云ふものに同情とやらよせて下さるはありがたひ社會の聲でござひますが、舊信仰のちいばに、舊思想の父、母は生活の頭痛になやみ、靈よりも肉の飢にくるしむ家庭に、いますこし穩かな贈ものが無いのでございませうか。

衣服を改良しなければならぬの、坐禮を廢さなくてはならぬの、漢字をどうとかするの、中々にやかましい太鼓の音でござひます。ストープも整へがたき家庭にて西洋料理の御稽古に熱くなり、盆踊りをとがめた姫御前は舞踏の御さらへに御忙はしいなど、おさんは思ひだしてもキーキーがわるくなるやうでござひます。どういたしまして決してその、御折角のくだされものを何のかんのと申

すのではありませぬ。ありませぬがせめてはやせしきおとなしき姫百合に天のくだせる露ひと雫はしいのでござひます。まごゝると云ふものは、國の寶家の寶、世界の寶だのに、古ひランプだからとてこれまでもすてゝ仕舞ひ、新らしければとて、電氣も通はぬ電燈ボヤをひからかすこと、苦々しいではありませぬか。

さりとして、折角いたゝいて喜んでゐるものを、破つてしまつてはケドの大泣どころか、やはり家庭内の大騒ぎ、こゝ一つどうしたらよいでございませう。

女大學の再興、武士道の大賣りだし、蝦茶袴に薙刀のとんだりねたりもあまりなる大太鼓でござひますネー。過渡時代とやらでもすこしもさしつかへのない、そしてまだ魔法つかひの金の杖のや

うな、そこからくるものを眞の寶にして仕舞ふ『あるもの』が、庖厨に鹽があるよりも必要であると存じます。

下女のくせにとんだ氣焔とやら氣まぐれやら吐きいだしましてまことに相すみませぬ、卵一つ煮るのでも一分間間違ふとスポイルしてしまひますもの思想の撰みわけ、主義のお料理、いまの日の本の家庭を治める奥様たちの責任は、中々なみ大抵でございます。御察し申ます。さやうなら、

(二月三日)



子どもの日記につきて

東 基 吉

子どもの日記を、誕生の始から、毎日通して記けて行くことは、母親に取つて、大層趣味がある許りではなく、子供を育てる上について非常に大切なこと柄であります。例へば目方や身長が、一月毎に増して行く具合がきちんと見えたり、今日は、何といふ言葉を感じたとか、昨日はどういふ言をいつたか、どんな遊びをしたとか、といふ様なことを柄を毎日記して行つてそして時々引くり返しては此前の所を讀んで見ることは、母親に取つてどんなに樂しきものでありませう。

夫れが、たゞ樂みといふ許りでなく、育て、行く上に實際中々大切だと申す事は、先づ第一に、子供が病氣にでもかゝつた場合に、平常の熱がど